

1853年プレストン・ストライキにおける女性労働者について —女性の参加と自己認識についての考察—

金 慧昇

本研究の目的は、1853年のプレストン・ストライキにおける女性労働者の役割を、積極的な参加者として再評価する一方、ストライキの重要な一部であったにも関わらず、女性自らが既婚女性の労働市場からの撤退を要求するようになった背景を分析することである。かつてのプレストン・ストライキ研究においては、争議における女性の活動についてまだ十分な検討がなされてこなかった。そこで、本研究は、主に『プレストン・クロニクル(The Preston Chronicle)』紙や、その他の地域新聞、パンフレットなどを分析することで、ストライキにおいて女性労働者が、操業中断、労働者会議への参加、寄付金募金、スト破り行為の阻止などを通じて重要な支持者として参加していたことを具体的に検証にする。

そして、そのように活発に活動していた女性労働者自らが、既婚女性の工場からの撤退を要求するようになったのは、1830年代からのチャーティスト運動と工場改革運動により形成された、女性の、とくに既婚女性の賃労働を問題視し、既婚女性の家庭における義務を強調する言説の影響であったことも明らかにする。当時女性労働者は、1)労働供給の制限による(とくに男性労働者の)賃金上昇、2)既婚女性労働者の賃労働、家事・育児の二重負担の軽減、3)独身女性労働者の経済的自立の維持、を期待し、既婚女性の工場労働に反対の意見を示していたと考えられる。

このような要求は、自らを結婚前後に分けて考える二重的な認識を表すものであり、そのような認識の二重性は、男性稼ぎ主と家族賃金イデオロギーを求めていた労働者階級の理想像と、女性の、とくに独身女性の賃労働なしには維持できないイギリス社会の現実との乖離の産物であったと考えられる。このように、当時女性労働者が直面していた女性労働自体への反対と、それにも関わらず重要な支持者として労働運動に参加していた経験は、その後の女性労働運動を理解する際にも参考されるべき前史として捉えることができる。

第一次大戦期からヴァイマル期のドイツにおける河川交通と工業化 —フランクフルト・アム・マインの東河港区域を事例に—

足立(塩川) 舞

本稿の目的は、工業化拡大期には副次的な役割を担っていたにすぎないとされる河川交通の意義について再考することである。そして、マイン航行が、フランクフルトの工業化に与える影響について、鉄道交通と河川交通との比較分析により明らかにする。本稿では、フランクフルト市都市史研究所所蔵のフランクフルト市の市参事会・市議会議事録を活用した。

ヨーロッパの大市、貿易中心地としてフランクフルトの地位確立にともなって、マイン航行の重要性はますます増大させた。こうした動向に対応するために、1886年にマイン運河、西河港を開港する。その後、西河港だけでは増加する船舶輸送量に対応することができずに、1912年に東河港が開港となる。

一方、鉄道交通も、フランクフルトはヨーロッパの中心に位置するので重要であった。自由都市時代の終わりまでに7つの鉄道路線が敷設された。1860年代におけるドイツ全体に

おける鉄道網の拡大とともに、鉄道輸送量も増大した。しかしながら、鉄道駅がその輸送量の増加に対応できずに、その解決策としてプロイセン政府は、統一された中央貨物駅の設置が必要だとし、1887年に中央貨物駅が操業を開始することとなった。その後、20世紀には、東河港に新東貨物駅が設置された。

第一次大戦の勃発を機として河川交通の全体輸送量は減少の途を辿っているが、戦前から戦後を通じて石炭の絶対的な輸送量は変わらない。石炭は、戦時体制下において、原料として、様々な場面で重要な商品であった。したがって、そのような役割を果たしていたマイン川交通は、第一次大戦中、重要であった。そして、第一次大戦を機に、河川交通はその内容面で変化を遂げたのである。

さらに、フランクフルト市は、戦時中も東河港の整備や拡張を怠ることがなかった。フランクフルト市は、戦時経済といった特殊な状況下においても東河港地区が「工業地区」として機能することを望み、その構想の下に行動していたのである。戦時、戦後を通じて行われた工業地区の拡張、さらには工場の建築において、建築材をはじめとする原材料の輸送は必要不可欠である。河川交通はこれら重要な原材料を輸送していたため、工業にとって必要不可欠な輸送手段であったといえよう。

既往のフランクフルトを対象とした河川交通史研究では、第一次世界大戦を機として河川交通は衰退したとする見解が主流である。しかしながら、河川交通の輸送商品の詳細や戦後も行われた港湾の拡張計画、鉄道との比較に着目すると、先行研究とは違った見解が見えてくる。従って、本研究では、第一次大戦後に衰退したとされる河川交通の観点から、さらには河川交通がフランクフルトの工業化にどのように影響したのかを明らかにする。